

研究者・実務家との良好な関係を築くことで、研究者ネットワークの拡充および協力体制を構築し研究体制と推進機能の強化を図った。協力体制としては、カンファレンスやプロジェクト会議への参加に加え、3名（東京大学大学院経済学研究科・岩本康志教授、大阪大学感染症総合教育研究拠点・村上道夫教授、京都大学経済研究所・井上裕介准教授）が新たに研究分担者として参画することとなり、研究体制の一層の充実を達成した。

②研究推進(A:政策形成過程における専門家のあり方、B:市民への情報発信、C:加速した社会課題)

・企画1（コロナ危機における学会の対応_A）【状況：対談→PDP05(成果)】

東京大学大学院経済学研究科・岩本康志教授と大竹による対談を収録し、PDPとして発信した。対談では、コロナ禍の日本経済学会における取り組みを紹介するとともに、行動の背景や思考に加え、環境（状況、諸外国対応）、選択肢、意思決定が時系列に整理された。対談を通じて、政策的価値と学術的価値の不一致、専門家による価値観の無意識的混入、法律に書き込まれることの重要性、政策研究と学術研究の違い、間違った情報を早く更新する重要性、平時における異セクターコミュニケーションの機会提供と継続運営の重要性、などの論点が指摘された。これらの論点は今後、別の専門家や実務者へ展開しそれぞれの視点、捉え方などを重ね合わせて問題の本質へ迫る予定である。

・企画2（コロナ危機における法とそれらの運用_A）【状況：対談→PDP06(成果)】

国立感染症研究所感染症危機管理センター・齋藤智也センター長と岩本教授、大竹による鼎談を収録し、PDPとして発信した。鼎談を通して、1）過去の経験に引きづられていた危機管理システムからの脱却、2）危機管理のスイッチを押す際に出口戦略（解除基準）を設定する難しさ、3）一部の専門家からの脱却-委員構成や有識者会議のあり方、4）政策研究と学術研究の峻別と政策研究に動員する制度設計、などの論点が指摘された。これらの論点は今後、別の専門家や実務者へ展開しそれぞれの視点、捉え方などを重ね合わせて問題の本質へ迫る予定である。

・企画3（平時と有事の倫理_A, B, C）【状況：企画・予備調査】

>>コロナ禍における「正しさ」について、人類学・倫理学・精神分析学・社会心理学を主体として感染対策に重点が置かれた措置による価値観の偏重を問い直す。

・企画4（利益代表と現場の実態-保健所・病院_A, B）【状況：企画・予備調査】

>>保健所長・保健所職員・厚労省・行政職員・医療機関など異なるアクター・立場における現場実態と政府（中央）で利益代表として議論で論じられていたギャップについて振り返り、今後の危機管理のあり方を考える。

・企画5（補助金と医療機関-医療経済学的観点から_A）【状況：取材→PDP準備中】

>>病院経営・医療現場・医系技官等のヒアリングを経て、医療経済学・法学・倫理学等を主体とした分析を行う。

・企画6（行政対応と現場-大阪府の取り組み_A, B）【状況：取材→PDP準備中】

>>大阪府のコロナ対応について、行政文書を元に現場実態をヒアリングして行間を検証する。行間や言葉になっていない事柄から問題点や課題を見つめ直し、自治体間の比較や政府との連携について将来を見据えた提言を目指す。

・企画7（行動変容による社会的影響-情報格差と優先度_B, C）【状況：企画・予備調査】

>>社会心理学、人類学、倫理学、ELSIといった学術分野を主体として、コロナ禍で起きた行動変容と社会的影響について分析し、情報格差や優先度といった角度から詳細に見つめ直す。さ

らには一度偏った「当たり前」を引き戻す可能性などに言及する。

・企画8（コロナ治療最前線-治療と臨床現場_A, B）【状況：企画・予備調査】

>>医学的なコロナ対策の系譜をまとめ、他の企画へ利活用するための医学的状況整理を実施する。

・企画9（コロナ禍を経た人口問題-子ども・高齢者_A, C）【状況：企画・予備調査】

>>コロナ禍で表立った感染対策の裏で、加速した社会的課題として、人口減少や高齢者対応について振り返る。経済学・社会学を主体として、福祉問題や少子化対策、労働問題などを自治体（特に郊外）を取り上げて分析する。過去の振り返りから将来のコンセプトや政策提言へつなげる素材を作ることを目指す。

いずれも企画調整は大竹・小出を主に実態のヒアリング・展開可能性を予備的に議論している。また、その他、企画案・展開案を複数検討中である（予備調査含む）。

③成果発表の企画調整とプログラム形成の可視化

本研究では研究者の日頃の研究活動を毀損しない共創の形を考えてきた。そのため、研究企画段階から参画研究者とは個別に意見交換の時間を取り、「信頼関係」の構築に努めた。研究者それぞれに、論文や著作、その他希望する成果や労力や時間に対する考え方が異なるため、最良の成果発表を相談する形で進めた。PDP-05では、岩本氏は自身の研究活動として論考を出しつつ、本研究ではPDPという形式で相互に有機的な成果発信の形式を実現した。また、PDP-06についても同様に本研究からはPDPという形式で成果発表を行なった。本年度、成果まで辿り着かなかった企画についても論文・著作・PDP、その他を議論しながら進めていく。また、PDPから得られた論点をプログラム形成し、異分野、異セクターへ展開することで論点とプログラムの多面性と多層性を獲得させる取り組みを加速させていく。

④ネットワーク形成の可視化

本研究では、JST-RISTEXをはじめとした別の研究課題とも交流を図り、研究者のつながりを支援する動きを検討していた。本年度は、RISTEX「科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム」プログラムサロン（14回）に、小出がコメンテーターとして参加し交流を図った。これらの縁を経て、プログラム研究推進委員である、神奈川県立保健福祉大学・黒河昭雄講師や次世代基盤政策研究所（NFI）・森田朗代表理事と定期的な意見交換をする関係を構築するに至っている。次年度以降も交流機会やこれまでの関係を維持・発展させるネットワーク形成を積極的に実施していきたい。

⑥パブリックリレーションズ（社会との情報交換）

PDP(2報)の発信、国際ワークショップ（2回）、シンポジウム(1回)、プロジェクト会議(2回)、カンファレンス(1回)を実施した。プロジェクト会議は外部有識者や実務家を招き意見交換したり、交流する場としても設計した。カンファレンスは基調講演と研究報告に加え、専門的な議論を行う場として答えを探るというよりは、本質的・根源的な問いを考える場として設計した。なお、プロジェクト会議やカンファレンスでの議論から得られた論点は各企画や展開の素材として利活用される。

【研究成果の発表状況等】

○論文（計2件）うち査読付論文 計0件、うち国際共著論文 計0件、うちオープンアクセス 計0件

①Discussion Paper; 岩本康志、大竹文雄、＜コロナ危機における学会の対応＞＜CiDER-PDP05＞＜2024.1.15＞＜査読無＞

②Discussion Paper; 岩本康志、齋藤智也、大竹文雄、＜コロナ危機における法とそれらの運用＞＜CiDER-PDP06＞＜2024.2.22＞＜査読無＞

○著作物（計3件）

大竹文雄「新型コロナ リスク判断 価値観次第」『読売新聞：地球を読む』2023年9月8日

Fumio Ohtake, "COVID risk evaluation now up to individuals", The Japan News, Insights into the World, 2023.9.8

大竹文雄・笠井信輔「コロナ禍でのがん闘病から見た社会の病理」2023年10月号

○講演（計0件）うち招待講演 計0件、うち国際学会 計0件

○本事業で主催したシンポジウム等（計6件）

①第1回・キックオフプロジェクト会議、大阪大学中之島センター(ハイブリッド開催)、2023.9.18、参加者（研究者16）

②第2回プロジェクト会議、AP東京丸の内（ハイブリッド開催）、参加者（研究者16）2024.2.2

③CiDERシンポジウム、東京よみうり大手町ホール大ホール、2024.2.3、参加者（現地257・オンライン924）【共催】

④Kyoto Workshop on the ethical issues at the end of life in Korea and Japan、京都大学高井ホール（ハイブリッド開催）、2024.2.22

⑤Kyoto Workshop on the Clinical Ethics Conclusion in Korea and Japan、京都大学文学研究科（ハイブリッド開催）、2024.2.28

⑥第1回カンファレンス、AP大阪梅田東（ハイブリッド開催）、2024.3.4、参加者（研究者20、実務者1）

○ホームページ

大阪大学感染症総合教育研究拠点（成果発表先として、DPやPDPはHP内に設置されています）

<https://www.cider.osaka-u.ac.jp/index.html>